2021年1月31日　久宝教会　降誕節第6主日礼拝

メッセージ「幸せはどこにある？」　　牛田匡牧師

聖書　マタイによる福音書　4章23節－5章12節

「幸せはどこにある？」と聞くと、すぐにメーテルリンクの『青い鳥』のお話を思い出す方もいらっしゃるかもしれません。「幸せの青い鳥」を探して、チルチルとミチルの兄弟が色々な世界を旅して、捕まえたと思う度に、それは青い鳥ではなくて、最後に自分の家に帰って来て、改めて見て見たら、青い鳥は自宅の鳥籠（とりかご）の中にいた。幸せはどこか遠くに探すものではなくて、身近な所に見つけるものだ、というようなお話だったかと思います。確かに、様々な所に旅に出掛けることが出来たり、安心していつでも帰って来ることの出来る家があったりする人たちにとっては、「幸せは身近にあるんだよ」と教えてくれるこの『青い鳥』の話は、良い話かもしれません。しかし、安心して帰ることの出来る家もなく、その日の糧（かて）もろくになく、自分の命すらままならない人は、「幸せはどこにある？」と問われても、そんな問いには答えたくない、答えられないのではないでしょうか。

今、世界では、新型コロナウイルス感染症に1億人以上が感染し、200万人以上がこの病気が直接の原因で亡くなっています。国や地域によって検査体制や医療体制、また生活環境も習慣も異なるので、一概に比較は出来ませんが、当初より貧しい国での感染、被害が大きく、貧富の格差によって命が選別される病気だと指摘されていました。世界各地でワクチンが開発されて供給が始まり、日本でもワクチン接種の計画が少しずつ進められているようです。しかし、そのようなワクチンもやはり、お金のある国、医療体制のインフラがある国が優先されるという現実があります。世界では、医療も受けられず、統計にも数えられないまま、罹患（りかん）し、重症化し、亡くなっていく方々も決して少なくないのでしょう。更に失業や差別など、コロナに関連した社会的な困難によって「コロナ関連死」と考えられる人々の数は、直接病気で亡くなった人々よりも多くおられます。そんな今日、この「幸せはどこにある？」という問いは、私たちにとってどういう意味を持っているのでしょうか。

今回の聖書の箇所は「マタイによる福音書」の5章から、有名な「山上の説教」の冒頭にある8つ、ないし9つの「幸い」の箇所でした。古く文語訳聖書では、「幸福（さいわい）なるかな、心の貧しき者」と訳されていましたが、口

語訳以降は「心の貧しい人々は幸いである」と訳されています。何故「心の貧しい人々」や「悲しむ人々」が幸いなのか。私たちの日常の生活感覚とは、まるで反対のように感じます。そもそも「心の貧しい人」とは何かもよく分かりません。それこそ「心の豊かな人」「豊かな感受性を持っている人」の反対かと思いますが、そんな何も感じないような人が何で幸いなのか、と訝(いぶか)しく思われます。それに対して「『心が貧しい』とは、『自分というものがない』『空虚である』故に、謙虚に神様を受け入れる人たちだ」などという説明を、これまでに何度も聞いて来ました。しかし、歴史の中を歩まれたイエス様が実際に語られた言葉は、高慢ちきな人々に対して「謙虚になりなさい」というような言葉だったのでしょうか。どうもそうではないようです。「マタイによる福音書」4 章 23 節以降には、イエス様がこの「山上の説教」を語った相手、5 章の 1 節で「この群衆」と書かれている人々が、どのような人々であったかが記されています。イエス様の周りに集まって来ていた人々は、決してお金持ちの権力者たちではありませんでした。むしろ、色々な病気や痛みに苦しむ者、悪霊(あくれい)に取りつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など、あらゆる病人たちであり（4：24)、町や村でも人々から差別され、忌避されていた人々でした。医学も未発達の時代です。様々な病気になるのは、悪霊(あくれい)の仕業であったり、本人や両親など誰かの罪の報いだと考えられたりしていました（ヨハネ 9：2)。そんな人々に対してイエス様は語られたのでした。

しかし、本当にイエス様は、そのような人たちに対して、「あなたたちは幸いである」「ハッピーだよ」「ラッキーだよ」と言われたのでしょうか。どうも「幸いである」と訳されている言葉自体を、見直す必要がありそうです。日本語では古くから「幸い」「幸福」であると訳されて来たこの言葉の元々の意味は「祝福されている」です。そのため「神様からの『祝福』なんだから『幸い』『幸せ』で良いだろう」と思いがちですが、そもそも「祝福」とは何なのでしょうか。「祝福」を物質的な豊かさや身体的な健康と考えると、それこそイエス様の周りに集まって来た人たちは、祝福されていない不幸な人々ということになってしまいます。釜ヶ崎で社会的に弱い立場に追いやられている日雇い労働者や元労働者の人たちと一緒に聖書を読み直している本田哲郎先生は、この「幸いである」を、「神からの力がある」と訳されています。「祝福されている」とは、そこに他でもない神様の力があること。安心して「そのまま突き進んでいい」、そこに神様からの力が働い

ているよ、ということだと考えられるのだそうです。そして、そのように理解する方が確かに、歴史のイエス様が実際に、弱く小さくされていた人々、様々な病気に苦しむ人々に対して、語られた言葉として、相応(ふさわ)しいのではないかと思います。

私たちはつい、ここで語られているイエス様の言葉を、現代を生きている、そして教会に連なっている自分たちに向けられて語られた言葉として聞こうとしてしまいます。「あなたたちは幸いですよ」と神様からのお墨付きを頂きたくて、ここに掲げられている 8 つないし９つを、それこそ目指すべき「徳目」であるかのように受け取ろうとしてしまいます。しかし、それは誤った理解だと言わざるを得ません。そのように誤って理解する時、私たちは「それらの徳目を実行できる人は良い人、幸いな人であり、実行できない人は悪い人、不幸な人である」と決めつけ、裁いてしまいます。むしろ、ここで語られているのは、「神様はどこにいて」「誰と共にいて」「その力はどのように働かれるのか」「どこを優先して選ばれるか」ということであり、教会に連なっているか、連なっていないかに関係なく、私たちはそこに連なるように呼ばれ、招かれているということなのではないでしょうか。

5 章 3 節以降、聖書協会共同訳など旧来の翻訳と、本田先生の訳とを比べてみると、随分と言葉が異なっていることに気付かされます。例えば「心の貧しい人」は、聖書協会共同訳の脚注にもあるように、直訳は「霊において貧しい人々」ですが、これは人間の精神的、内面的なことを言っているのではなくて、「霊という尊厳を持つ人間が貧しく小さくされている状態」、また「貧しさ（抑圧）による痛み、苦しみが人間存在の根底にまで響いている状態を指すもの」だと考えられるそうです。「ルカによる福音書」6 章 20 節にも同じイエス様の言葉が、単に「貧しい人たちは」と記されていますが、マタイとルカは異なる表現で同じことを言っているのだと理解することが出来ます。3 節以降も、細かい点で訳語が異なりますが、12 節まで、本田先生の訳で読んでみます。

[3] 心底貧しい人たちは、神からの力がある。天の国はその人たちのものである。
[4] 死別の哀しみにある人は、神からの力がある。その人は慰めを得る。
[5] 抑圧にめげない人は、神からの力がある。その人は地を受けつぐ。

[6]解放に飢え渇く人は、神からの力がある。その人は満たされる。
[7]人の痛みが分かる人は、神からの力がある。その人は自分の痛みを分かってもらえる。
[8]心を澄ませている人は、神からの力がある。その人は神を見る。
[9]平和のために働く人は、神からの力がある。その人は神の子と呼ばれる。
[10]解放をこころざして迫害される人たちは、神からの力がある。天の国はその人たちのものである。
[11]わたしのことで、人々があなたたちを非難し、迫害し、偽(いつわ)りをもってあらゆる脅(おど)しをかけるとき、あなたたちは神からの力を受けるのだ。[12]喜びなさい、嬉しく思いなさい。天には大きなむくいがある。同じように、人々は、あなたたちよりまえの預言者たちを迫害したのである。（本田哲郎訳『小さくされた人々のための福音』新世社）

もちろん、貧しくあること、悲しんでいること、食べ物にこと欠き飢えていること、迫害されていることが、良いこと、幸せなことではありません。それらから解放されるように、働きかけ立ち上がっていくことが必要です。そのために共に働く仲間たちの手を介して、神様の力が働きます。また、生活困窮者の方や、終末期を迎えられている方と接する時に、「支援する側・される側」というタテ型の一方的な関係を越えて、その場に働く不思議な力、人間存在の持つ美しさやすばらしさ、解放感を感じることもあります。一見「幸せ」とは対極にあるように見える、そのような場にこそ、確かに共におられる神様の力が働き、感じられるのではないでしょうか。「幸せはどこにあるか」ということについては、聖書に限らず古今東西、多くの人々が語って来たことと思います。「それはどこかにあるものでもなく、ただ足るを知ることだ」とも、「どこにでも見出せるものだ」とも言われて来たかと思います。しかし、歴史のイエス様の生き様、言葉と振る舞いは、そんな「幸せ」については、何も述べられていないように思います。少なくとも、十字架に架けられて殺された受難は、そんな「幸せ」の対極にある出来事でした。イエス様がその言葉と振る舞いをもって示されたのは、命の源である神様からの力を頂きながら、神様と共に歩む生き方だったのではないでしょうか。今日(こんにち)、このコロナ禍の中を生かされている私たちもまた、そこに連なるようにと、ここから招かれて行きます。